# 第６回　中泊町少年の主張大会

８月28日㈫に町総合文化センター「パルナス」で開催されました。ここではその発表の一部を紹介します。

## 「今、地球がかかえていること」　中里小学校　６年　高杉正彩

家族で鰺ヶ沢に釣りに行ったとき、ごみが落ちているのを見て、残念な気持ちになった。テレビやおじいちゃんの話では、テロ事件や核実験などの恐ろしいニュースが地球上で起こっていることを知った。「ごみに関心を持つこと」が第一歩となり、争いのない「平和な地球」、魚が住める「自然豊かな地球」を未来に繋げるよう、地球に優しい生活をみんなで心がけたい。

## 「コミュニケーションの力」　武田小学校　６年　鈴木和咲

修学旅行で町のPR活動をすることになったが、PRがうまくできるか不安があった。うまく話せなくても町のことを相手に知って欲しいと思えたことで、不安が楽しみに変わった。PR活動では説明が相手に届いたとき嬉しかった。私にとっては自分を成長させてくれた大切な経験になった。この経験を、たくさんの新しい出会いに活かしたい。

## 「小さな命」　薄市小学校　６年　鎌田星砂

父の会社の資材置き場にいる子猫を見に行った。やがて、子猫はいなくなってしまったことをきっかけに調べると、年間で45,000匹の猫が殺処分されていることを知った。殺処分される猫たちを救って、幸せにすることが私の夢になった。わたしは、獣医になるための勉強を始めます。少しでも小さな命が救えるように。

## 「仲間が教えてくれたこと」　小泊小学校　６年　太田颯真

僕が伝えたいことは「仲間の大切さ」だ。母のすすめで始めた陸上で、先輩たちのアドバイスのおかげで、決勝まで残れるようになった。そのときは、僕以上に仲間が喜んでくれて、本当の優しさを学んだ。仲間と壁を乗り越え、その先の新しい自分を見つけられる。

## 「今私達にできること」　中里中学校　１年　野上理心

西日本豪雨の報道で、ある被災者は物資を送ってもらうことは有難いけど、一番はお金が必要だと言っていました。そのとき「募金」だと思った。「情けは人のためならず」と言うように、嬉しいことがあったときでも募金の形で、困っている人に分けてみてはどうか。

## 「悪い伝統を無くすには」　小泊中学校　１年　鎌田亜衣海

小泊にはゴミと落書きが多い。「このくらい捨ててもいいだろう」、「落書きしても誰かが消すだろう」ではなく、「私から拾おう！」、「消してあげよう」と思い直すことで、小泊はもっと良い町になると思います。

## 「君がくれたもの」　中里中学校　２年　新岡　栞

心を許し合える「友達」はいますか。私にはいます。悩んでいると、その人はすぐ悩んでいることに気づいて、「大丈夫？」と声をかけ、悩み事を聞いてくれました。私は感謝の気持ちでいっぱいになった。その人とは心が通い合い、今では心から信頼できる関係になった。困っている人がいたら、今度は私が勇気を出して声をかけたい、あの日友達が私にしてくれたように。

## 「いじめを防ぐためにできること」　小泊中学校　２年　山田航希

僕の学級、２年Ａ組ではいじめがない。それは仲がいいからだ。僕の学級では、毎日必ずクラス全員と話すようにしている。みんなと話をすることで、自分と違うところも受け入れ、他人を認めることにつながるかもしれないからだ。加害者や被害者にならないためにも、他人の気持ちを思いやり、違いを認め合える意識を持っていきたい。

## 「私が思う中里高校」　中里高校　１年　山谷雅玖人

私が中里高校に入学して、５か月がたとうとしている。全校が家族のようなアットホームな学校で、すぐ慣れることができ、有意義な高校生活を送っている実感がある。授業では、少人数を活かした先生方の熱心な指導が魅力で、行事を通して多く体験できる。しかし、生徒数は減る一方で、どうすれば、より活発に盛り上げる事ができるか。１つはスクールバスを増やす事、もう１つは在校生の私たちが中里高校の魅力を発信していくことだ。数年後、私たちの母校として中里高校が存続していることを願っています。

# 中里中修学旅行生「青森県の中泊町を知っていますか」

中里中学校２年生56人が修学旅行で訪れた東京・上野公園で、町のPR活動を行いました。町では、メバル膳をはじめとする「メバル推し」でまちづくりを進めていますが、ウスメバルを食べたことがない子が多数を占めていました。そこで、メバルの美味しさを伝えてくれる「メバルっ子」の育成に取り組んでいます。メバルのおいしさを実感し、自分たちでそのおいしさを伝えてもらうために、６月に町内全小中学校の給食にメバルの塩焼きが提供されました。また、修学旅行前の８月30日㈭には、町水産商工観光課の職員を講師に招いた説明会で、町の魅力や交通アクセスなどについて再確認しました。

PR当日の９月21日㈮は、12班に分かれてPR活動をしました。新岡栞さんは「中泊町の魅力や東京からの行き方をPRした。声を掛けると、興味を持ってきいてくれる人だけでなく、中泊町を知っている人や来たことがある人がいて嬉しかった。」と手応えを感じていました。

# 地域で生まれ、地域で育ち、地域を助け、地域で安心して老後を迎えるために

ピュア宅配便・見守り号は、買い物支援と町民の見守りを兼ねた商品配送サービスとして８月１日からスタートしました。

県の地域共生社会モデル事業として実施され、ピュアが注文や宅配を担当し、町商工会が日用品などを納品します。また弘前大学が持続可能なサービスかどうかを検証します。

ピュア宅配の対象となる地区は、中里、内潟、武田の３地区です。

## 利用者の声

中里地区二タ見の利用者（69歳）は「ピュア宅配・見守り号が来てくれることでとても助かっている」と話してくれました。病気を経験してから、出歩くことが難しく、買い物に不自由していたそうです。

ピュア宅配便の魅力は、ピュアの新鮮な野菜や旬の物、お総菜などが手に入るばかりでなく、配達代も割安な所だと言っていました。

便利なだけでなく、昨日見たテレビの話とか世間話もできて配達が楽しみ